

その時、ファンファンは?

「その時、ファンファンは?!」では、ファンファンが実施してきたプログラムの裏側で、運営に関わる一人一人がどんなことを考えていたかを振り返る副音声のようなトークをまとめました。

話している人
【ファンタジア! ファンタジア! 事務局】
青木彬、ヨネザワエリカ、遠藤純一郎、磯野玲奈

【東京アートポイント計画】
プログラムオフィサー
岡野恵未子

4月 7都府県に緊急事態宣言(4/7)

「keep」開始(4/20)

緊急事態宣言下でもファンファン

青木：今年度のプログラムが対面形式では難しいんじゃないかという話がもう4月から出ていて、元々僕らの予定としては4月、5月ぐらいには新拠点を稼働させたり、そこでファンファン倶楽部を動かしたりと、そういう予定が結構あったけれども、一旦頭を切り替えないといけなくなって。でも今、終わった後に振り返ると結構早く切り替えてたよなって思いますね。

エリカ：そうそう。対面形式が前提だった WANDERING とかファンファンレターをオンラインで作る試行錯誤などは4月から着手していましたよね。

岡野：青木さんは急遽行ったプラクティスのテキストを4月中旬くらいには書いてましたね(ドキュメント p.2 参照)。

青木：事務局内の取り組みで大切な出来事のひとつとしては、keep(★)を使い始めたのが4月20日でしたね。keepの中で話していたキーワードって、今年度のプログラムの内容にも影響を与えていたんじゃないかと思うんですね。

エリカ：5月から6月にかけては「ラジオの時間」が段々形作られていった時でしたっけ。初めは確かゴールデンウィーク頃にトライアルとしてやってみたんですね。

青木：「ラジオの時間」(★)をやろうとなったのが、普段だと仕事する時に顔を合わせてみんなでお昼に行ったりとか、雑談をする時間があった。自粛中にそういうちょっとしたコミュニケーションが減ってしまった中で、オンライン上でその時間をどうにか作りたいということと、遠藤くんが企画立案に向けた話し合いで提案してくれたのがきっかけでしたよね。

遠藤：そうですね。ラーニング・ラボを今年どうやろうかという検討をする時に、それぞれが考えていることを十分に話せれば、オンラインでも密度のある話ができるのではと。そこから聞く側も話す側も楽しくなる方法を考えてラジオ風の情報共有を提案しましたね。

コロナ禍での情報共有でいうと、Slackで個人チャンネルを立ち上げて、リモートワークを始める時にその日の気分や体調を報告しながら「ファンファン」とつぶやくという取り組み。

「keep」とは・・・
Google Keep の略。Google が提供するメモサービスを事務局が誰でも書き込める日記として活用。コロナ禍での心境の変化や日々の記録、実施プログラムについて感じたことなどを不定期に書き込む。

5月 緊急事態宣言 5/31 まで延長(5/4)

「ラジオの時間」開始(5/5)

岡野：個人のチャンネルはなんでやり出したんですしたっけ。

青木：みんなが顔を合わせないで作業するようになってしまった中で「これお願いできる?」みたいなコミュニケーションもやりやすいのではないかと思ったんですね。この時期 Slack も活発で、FYI(★)のチャンネルにもたくさん投稿がありましたよね。先ほどの「ラジオの時間」も毎週継続し始めたり。

遠藤：そうですね。ラジオは毎回色々工夫し出して、ジングルを入れたり、交通情報風の前振りをしてから始めるとかもしました。

エリカ：ちょっとした遊びが多かったですよね。

もやもやが言葉になっていく場所

エリカ：7月末に keep ではリレーエッセイも始めましたよね。書く順番を決めて、リレーのように投稿していくものです。

青木：最初のリレーは、テーマは特になかったんですね。たぶん書き出しが僕で、セツルメント運動の話などを書いていた。

遠藤：「アートを諦められるか」という問いが出たんですね。

エリカ：8月にはそれまでに投稿された keep からそれぞれが「〇〇賞」を決める企画もやりましたね。

青木：この時点で、keep には 80 本くらいの投稿がありましたもんね。僕は「磯野賞」を受賞しました。

エリカ：遠藤さんは、磯野さんに「続きが気なるで賞」、岡野さんに「気になり続けているで賞」をあげていますね。

「ラジオの時間」とは・・・
事務局がオンラインでの定例会の冒頭に近況や情報共有、テーマに沿った関心ごとを話し合うコーナー。2~3人1組になり、パーソナリティ役とゲスト役に別れてラジオ番組風におしゃべりする。話し手も聞き手もカメラはオフにして、音声のみで行う。

「FYI」とは・・・
FYIとは For Your Infomation の略。事業に役立つようなツールの紹介やおすすめの展覧会、書籍など気になった情報をシェアする Slack 上のチャンネルのこと。



6月 全国で緊急事態宣言解除(5/24)

プラクティス「みじかい間、少し遠くまでの間」(5/28)

「keep」の中から「〇〇賞」を決める(7/8)

遠藤：いっぱい気になっていたんですね。「〇〇賞」の企画をやったきっかけはなんでしたっけ?

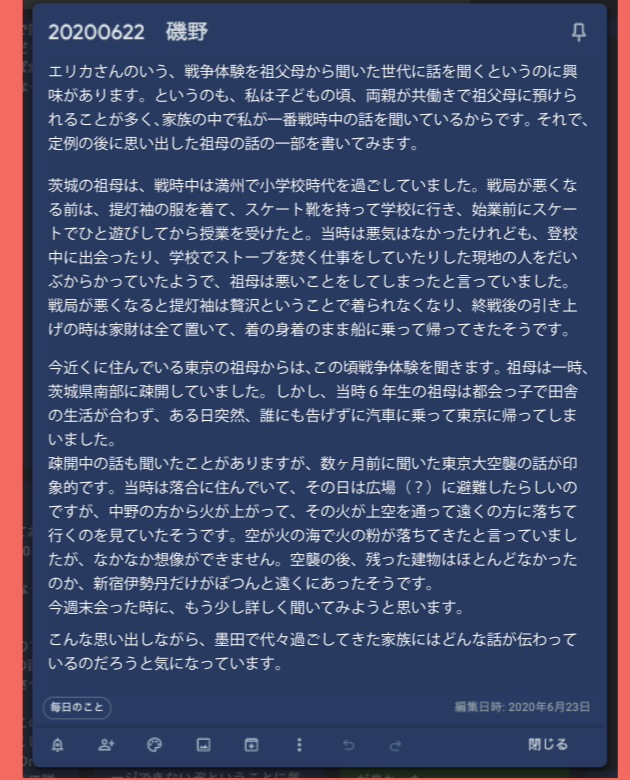
エリカ：たぶんこの時期って、緊急事態宣言は明けたけどこれからどうすんだ、という戸惑いの過渡期だった気がします。

遠藤：中だるみというか、盛り上がり欠けるような時期でもあったのかな。

岡野：忙しくなってきて、投稿される数も減ってきてという時期だった。

エリカ：忙しかったのはちょうど、新生ファンファン倶楽部(ドキュメント p.8 参照)の募集についても議論をしている時期だったからですね。

「続きが気になるで賞」を受賞した磯野の keep の投稿



7月 Keep 家の中のごと 毎日のごと



青木：緊急事態宣言は解除されたけど、どこまで何をやっていいのかわからない時期が続いていて。それもあって、keep を振り返ってみることで、自分たちが4月頃から何を考えてたのかを思い出していたんですね。

エリカ：この時期、ミーティングでも議題が多かったですよね。ファンファン倶楽部に加えてプラクティス(ドキュメント p.16 参照)も始動していたし、ラーニング・ラボの企画も詰め出していた。7、8月はあつという間でしたね。

岡野：色々な議題がある中で、ファンファン倶楽部の部員をどうやって集めようか、どうしたらファンファンが伝わるだろうかという話を、超もやもやしなりましたよね。

青木：不特定多数の人を集められなかったこの時期、ファンファン倶楽部は事務局だけで行っていましたね。そこで個々人の関心ごとをシェアしたり、ワークショップ的なことをしてみたり。

磯野：この時期私はファンファン倶楽部で「おしえて! 新卒部」(★)を始めました。

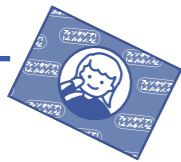
青木：そうでしたね。大学院卒業を控えた磯野さんが、卒業後の進路についてのもやもやを相談するという。

磯野：私のコーナーなのに、教えてくれる皆さんの方がしゃべっていました(笑)。

エリカ：そうやって事務局でのファンファン倶楽部の実験が続く中で、9月はオル太のリサーチも急スピードで動いた時ですね。

青木：やっぱり表に発表されているプログラムを支えてきた根底に、トライアルしていたファンファン倶楽部があったり、keep を書いていることだったり、ラジオの時間があるんだと思いました。大事な言葉などはそこで生まれていますよね。これがただの企画会議だけしか時間がなかったら、話しきれないことが多いと思うんです。

「おしえて! 新卒部」とは・・・
事務局の磯野が、「ファンファン倶楽部」内で取り組んでいたコーナー。大学院卒業後の進路について相談をする。



満を辞して・・・

エリカ：10月はファンファン倶楽部の第1期のメンバー募集が始まった頃ですね。

磯野：この頃、青木さんに副部長に任命されて、結構ドキドキしてました・・・。

岡野：第1期の倶楽部は個々人の関心がうまく結びついて、次にやることのアイディアが出てくるみたいな状況が初回や2回目くらいから出ていた気がして、それを見ていて“いける”と思った記憶があります。

エリカ：青木さんはどうでしたか。そういう感覚はありましたか？

青木：“いける”というか、また違う形で倶楽部が出来上がっていきそうだという感覚はありました。楽しさと同時に不安もあり。

岡野：確かに、どうやって終わるのかとか、どうやって記録を残すのかとか、不安な点はありましたが、募集にあたって打ち出していた、「安心しててもやもやできる場所」みたいな場は作れたのかもと思えた感じですかね。

エリカ：11月に入るとプラクティスの展示も始まりましたね。展示は無事オープンできて良かったですね（ドキュメント p.16 参照）。

岡野：東京アートポイント計画としても、実は今年度初のオフラインイベントでした。

青木：そうでしたよね。みんな結構オンラインに切り替えてたりしていましたからね。でもやっぱりあの時期に展示できて良かったなって思います。

エリカ：磯野さんや遠藤さん、展示の受付などをしてみてどうでしたか。話しかけられましたか？見に来た人たちから。

遠藤：青木さんやエリカさんが展示会場の前の道路で、来てくれた誰かとずっと喋っているという光景はオフラインならではの、印象的でしたね。

エリカ：オル太さんも終盤、ほぼ毎日いらっしゃってくれましたね。

青木：今までファンファンが会って来た人たちとはちょっと違う客層というか、いわゆるアート界隈の人たちが多かったですね。色々な展示も中止や延期になっていたから、そういうものを観たいと飢えている鑑賞者も多かった印象がありました。

エリカ：近くのToken Art Centerの展示とハシゴする人たちも多かったですね。

新生ファンファン倶楽部！

エリカ：プラクティスの裏ではファンファン倶楽部も盛り上がりましたね。例えばテキストを楽譜のようにして読むというワークショップがありましたね。

遠藤：これは、オル太の映像に出演してセリフを読んだことがきっかけでやってみようと思ったことなんですけど、私がセリフとして渡されたテキストが、オル太が地域でインタビューをした時の書き起こしみたいなものだったんです。元々どうやってしゃべっていたのかなとか想像したり、どうしゃべったらそれがいい感じになるのかななどを考えていて。話した言葉が文字になった時、スピード感とかリズムみたいなものが消えてしまうけれども、そのテキストを、間を開けるとか、ゆっくり読むとか、楽譜みたいに読み方を書けないかなと考えて、みんながそれぞれ同じテキストに、楽譜の記号みたいなイメージで書き込みしたものを交換して読んでみる遊び、みたいなことをしました。

エリカ：第1期の最終回では倶楽部の活動をまとめるZINE作りもありましたね。

磯野：ZINEをみんなで作った時に、3ヶ月近くみんなでやってきことがそれぞれの形になったのが良かったなって思いました。

遠藤：そんなにバリエーションができるのかな？と思っていたけど、みんな全然違いましたね。面白かった。

ファンファンを伝える言葉を探して

青木：ラーニング・ラボのゲストやテーマは結構長い間揉んでいましたよね。「私たちの加害者性」というキーワードが出ていたのは、4月か5月くらいだったけど、そこから具体的なテーマはどうするかとか、ファンファンらしさみたいなものをどうやって作るかとか。

岡野：当日トークを聞いていて、ゲストの方から出てくるフレーズが、それまでファンファンで話していたことを、言い換えてくれているような感覚になる瞬間もあって、テーマや聞き方の切り口と設定がうまくできたのかなと思いました。

遠藤：3週連続の配信ですごい怒涛でしたね。それぞれのテーマを渡り歩く感じが面白いのと同時に、いくらでも話せるくらい深いひとつひとつのテーマと来年度どうやって向き合っていくか考えたいなと思いました。

磯野：岡野さんの言うファンファンの思考を言い換えてくれている感覚を私も感じました。ファンファンが4月くらいから話して出てきたフレーズを表面に出しているわけではないのに、ゲストから出てくる言葉がそのフレーズのレスポンスのように聞こえたり。

エリカ：トークは面白かったけれど、それを見た人が、どう思ってるか、その思いを事務局にどうフィードバックするのか、その思いは誰に届けなきゃいけないかというところは、より一層考えていきたいなと思いました。なんていうか、オンラインはたくさんの人が見てくれるけど、ファンファンから何かを届けられる人って、手渡してできる範囲の人たちぐらいな気がするんですね。

青木：出来るものの効力というか、それがちゃんと伝わる範囲って、100mぐらいかもしれないのに、それを1キロ先に届くようにパッケージしたら、やっぱり無理があるじゃないですか。だから自分たちが作りたいものをちゃんと届けられる範囲がどこまでか、を設計することは重要ななと思っています。誰にとっても切実なものになるかは考えなくてはいけませんね。

今年も小さな主語を大切に

エリカ：1月にはファンファン倶楽部第2期の募集を始めましたね。

岡野：第2期は、第1期でできたことやできなかったことを丁寧に改善しながら、副部長と部長（遠藤）が頑張って計画を立てていたなという印象があります。

磯野：やってみなきゃわからないという部分もありながらも、どうすれば良いかとか、来年度に繋げるためにはどうするかみたいな話を2人で結構していました。

青木：第2期では広報にあたっては投げかける言葉や方法を少し変えましたよね。そのあたりはどうですか？

磯野：毎回申し込みがある度に「うわ〜」という喜びがありました。SNSだとどれくらい届いているのか実感が沸きにくいので、申し込みがあると、「ちゃんとレスポンスがあった！」という感じがして。部長はどうですか？

遠藤：第1期の様子も含めて、「集まれる場」みたいなものを作っているよということも伝えた時に、面白そうという反応が返ってきてくれましたね。

青木：企画としてまとめることを目指すというよりは、倶楽部という受け皿でみんなのやりたいことやもやもやを話し合えるという状況が出来ているのは、ファンファンにとって良いアクセラが踏めてるんじゃないかなって思っています。

エリカ：ある時私が「広報」についてもやもやしていることを投げかけて、それをテーマにして各自がkeepで思っていることを書こうということになって、そのテキストをベースに、1人1分ずつトークしていくのを何周かしてみるという話し方も事務局内で実験しましたね。

遠藤：こんなふうにこの1年間のメインのプログラムじゃないところも振り返るという「その時、ファンファンは!？」も、色々な話し方の実験があったからこそそのアイデアですよな。

エリカ：こういう振り返りちょいちょいできたらいいですよね。秋ぐらいから企画が忙しくなると、広報やアーカイブについてもどうすべきか色々考える時間がやってくるみたいなことが、自然に起きると思います。でもファンファンは考えるための時間を生み出す工夫をたくさんして来れたじゃないですか。「その時、ファンファンは!？」の振り返りにも遊び心があるし、こうやって考えたり、話したりする時間の積み重ねが次に繋がっていく予感がします。

青木：確かにファンファンはたくさん話し合ってきたよね。一見すると遠回りのような時間から今年度のプログラムが生まれてきたので、次のアクションに繋がるようなこの振り返りの時間が大切なのだと思います。

岡野：ドキュメントブックは前回作った時も、ファンファンの事務局らしいかたちとか、等身大の小さい主語で語るという話をしていたと思うのですが、また今年もこういう形でファンファンらしく記録をする機会が設けられたのが良かったなと思いました。

(収録日 2021年1月23日／2月6日)

発行日：2021年3月22日

発行者：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
発行所：東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階
編集/デザイン：ファンタジア!ファンタジア!事務局

ファンタジア!ファンタジア!一生き方がかたちになったまち—
主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、一般社団法人うれしい予感
※本事業は「東京アートポイント計画」として実施しています。